

探訪 北の風景 88

樺太引き揚げ三船遭難 留萌管内小平町

青木和弘

1945年（昭和20年）8月15日、日本はポツダム宣言を受諾して無条件降伏し、太平洋戦争は終結した。しかし、それに先立つ同8日、ソ連は日本に宣戦布告、ソ連軍は南樺太の国境を越えて進撃を開始した。

当時、日本領だった南樺太の人口は約40万人。ソ連参戦で、樺太庁は8月10日、住民の北海道への緊急疎開を決め、同13日から開始する。疎開対象は、老人と14歳以下の子ども、40歳以下の女性と病人など約16万人。疎開には稚内・大泊（樺太）間の稚泊（ちはく）連絡船の宗谷丸はもちろん、貨物船や軍の作業船などあらゆる船舶が動員された。戦火を逃れ「引き揚げ船」に先を争うように乗り込んだ老人や女性、子どもたちを戦争の惨禍が

襲った。小樽に向かった小笠原丸（1403トン）、第二新興丸（2700トン）、泰東丸（877トン）の3隻が8月22日の朝、留萌沖でソ連の潜水艦に攻撃され、2隻が沈没、1隻が大破して、約1700人の命が奪われたのだ。

引き揚げ船に持ち込める荷物は食料と生活必需品。荷物は一人一個30キロ以下で一家族3個まで。「産めよ増やせよ」と子づくりが奨励された時代だから、子どもが5人、6人いるのがあたりまえ。祖父母らと子どもたちを引き連れて、重い荷物を背負って乗船し、船室や貨物を積む船倉はもちろん、甲板にも、船上のあらゆるスペースにぎっしり詰め込まれた。

乗員乗客約780人中667人が死亡した泰東丸で、甲板にいて奇跡的に生き残った女性Kさんが当時の様子を証言する。

「潜水艦からの射撃が始まったとき、激しいショックを感じて隣を見ると、1メートル離れたところに胴体をもぎ取られた人間の足が二本転がっていた。兵士が『伏せれ！伏せれ！』『何か物を被れ』と大声で叫んでいたので、子供もたちと甲板に伏せ、みんなで頭から毛布を被った。まもなく『船が沈む。早く逃げろ』という声に顔を上げると、船は真横になろうとしていた。十一歳を頭に九歳、五歳、三歳の四人の子供と手をつなぎ甲板をすべり落ちた。海中に深く沈み、頭のをえでこちゃこちゃしている浮遊物をかき分けて海面に顔を出したら、4人の子供が次々浮き上がっ

てきた。近くにあった一片の板に母子五人がすぐりついたが、子供たちは波をかぶるたびに一人、また一人と海に呑まれていった。どうすることもしてやれなかった。地獄だった」。6時間ほど経った午後4時ごろ、Kさんは救助船のボートに引き揚げられた途端、気を失った。収容された船内で父親に再会したが、母親と子どもたちはいなかった。

スターリン率いるソ連は、北海道の北部を併合しようとして、留萌上陸を目指して近海で潜水艦の作戦行動を開始していたことが、ロシアに残る戦争記録から分かっている。ソ連の北海道領有を米國が強硬に反対したため、スターリンは8月22日、北海道侵攻をあきらめ戦闘を終了。同日の午後0時10分、樺太の東海岸にある知取町（しるとるま



「三船遭難慰霊之碑」と「慟哭の海に誓う」の歌碑（右）。女性や子ども、老人ばかりが乗り組んだ樺太引き揚げ船3隻が、目的地の小樽港を目前に、ソ連の潜水艦の攻撃で1700人あまりが犠牲になった。日ソの停戦が樺太で調印される日（8月22日）の朝の出来事だった



日本海を見渡す旧花田家番屋の海側に「にしん文化歴史公園」があり、夕日をイメージしたモニュメントや松浦武史郎像などがある。画面の外、左側に「三船遭難慰霊之碑」や、遺族会が建てた「慟哭の海に誓う」の歌碑がある



旧花田家番屋は国指定重要文化財で北海道遺産でもある。1905（明治38）年頃に建築され、道内で現存する番屋では最大の規模だ。当時、雇い人が200人を超えた大鯨漁家で、現在「道の駅おびら鯨番屋」を併設、年間を通じて公開されている

ち）で「日ソ停戦協定」が成立した。協定の成立が発表されたのは午後7時だった。あと1日早くれば……。

その後、沈没した小笠原丸と泰東丸は発見され、遺骨の捜索が行われた。小笠原丸で頭蓋骨の歯の治療跡から一人の身元が判明したものの、後は小さな骨片ばかりだった。泰東丸からは遺骨はまったく見つからなかった。

三船遭難からこの夏で76年になる。その悲劇を知る当事者は減ってしまい、慰霊祭の出席者も年々減少している。

戦争を絶対に繰り返さないために私たちができることは、次の世代に、戦争の愚かさをしっかりと語り継ぐことだろう。

Kさんの証言は、北海道新聞社が1988年に出版した『慟哭の海―樺太引き揚げ三船遭難の記録』（道新選書）より引用させていただいた。